

日本分子生物学会 キャリアパス委員会主催 ランチョンセミナー2014 —博士の多様なキャリアパスを切り開く—

- 日 時：2014年11月26日（水）11：45～13：00
- 会 場：パシフィコ横浜 3階 301
- 司 会：岩崎 渉（東大・理）

○司会（岩崎 渉） それでは、あと 2 分ほどお時間がございますけれども、少し前倒しに分子生物学会キャリアパス委員会主催のランチョンセミナー2014「博士の多様なキャリアパスを切り開く」を始めたいと思います。私、キャリアパス委員の岩崎と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。（拍手）ありがとうございます。

このランチョンセミナーでは、会場の皆さんとパネリストによる双方向のディスカッションを行います。それにあたって、こちら（サブスクリーン）でご案内しています専用サイト（セッション終了と同時にクローズ）に、今、お弁当を食べながらでもいいのでアクセスしていただければと思います。アクセスすると、上のほうに選択式のアンケート、下のほうにメールでコメントをお寄せいただく欄がございます。その選択式アンケートについては、博士課程でない方は博士課程に進んだものと考え、PIの方はポストドク時代のことを思い出して、お弁当を食べ終わったら回答をいただければと思います。また講演の後にパネルディスカッションがありますので、講演に関する質問や感想、そのときどきのトピックに合わせたコメントを、下の方の欄からお寄せください。

このランチョンセミナーは、博士課程の方あるいは博士号を取られたあとの方のキャリアパス、中でもいわゆるアカデミアの外のキャリアパスについて扱います。この問題は皆さんもよくご存知のように、ずっと議論されてきた問題で、博士を取ったことでキャリアパスが難しくなるという意見もありますし、一方で博士という能力がさまざまなところで求められている、そういった意見もあります。私としては、博士号というのは未知の問題を設定して、それを解決して得られるものなので、博士のキャリアパスということに答えがないということはむべなるかなという気もするのですが、その状況に今回のこのパネルディスカッション、そして 2 つの講演を通じて前向きな展望を抱けるような、そういうランチョンセミナーにできればと思っております。ぜひ積極的にこちらの URL からコメントをお寄せください。

今日はまず、二人の講演者に 2 つの視点からお話をいただきます。まずお一人目は、ポストドクをされたあと民間企業に就職し、複数の企業にわたってキャリアを構築されてきた、つまり主観的な、あるいはご自身の経験として、お考えをお話しいたします。それから、そういった主観的な観点に加えて、もうお一方、多くの博士のキャリアパスに関するサポートを活発にされてきた、要は客観的な、あるいは戦略的な観点から、この博士のキャリアパスということについてご講演をいただきます。それを踏まえて後半でパネルディスカ

ッションを行いたいと思っております。ぜひ、こちらの専用サイトから選択式のアンケートにお答えいただき、講演が終わりましたら、それぞれのトピックに対して活発なコメント、質問、意見等をお寄せいただければと思います。

さて、アクセスできましたでしょうか。このランチョンセミナー、毎年、時間が押し気味になりますので、早速第一の講演に移りたいと思います。まず、谷澤欣則さんに講演をいただきます。谷澤さんは、名古屋大学の大学院理学研究科で分子神経生物学の研究で博士号を取得されました。そのあとイギリスケンブリッジの MRC 分子生物学研究所でポスドクを経験、そして、民間へ移る決断をされて米国のコンサルティング会社のインターンシップ、それからバイオベンチャーでの技術営業を経て、現在は日本イーライリリー株式会社で“メディカルリエゾン”という職種で活躍されています。そういった海外での経験、およびご自身のキャリアパスを切り開いてきた経験に基づいてお話をいただきたいと思っております。谷澤さん、よろしくお願ひいたします。

○谷澤欣則 どうも、丁寧なご紹介をいただきましてありがとうございます。日本イーライリリー株式会社の谷澤と申します。本日はこのような発表の機会をいただきありがとうございます。初めにおことわりで、特に青字で書いた部分ですが、先ほどご紹介いただいたとおり、本日の発表は私の個人的な経験や気づきを紹介することを目的にしております。それで、私自身、すごく大きな目標があつて、それに向かって順調にやってきたというような感じではなく、むしろその場その場で試行錯誤した結果、今のようなキャリアになっているという発展途上の状態ですので、どちらかという、どうしたらいいのかわからないという方に参考になるのではと考えています。事例の 1 つとしてお聞きいただければと思います。

こちらは皆さんにもわりと有名な図かもしれませんが、バイオロジーの Ph. D. キャリアに関して米国で取られた統計を数字でまとめたものです。詳細は省きますが、だいたい Ph. D. コースに進んだ 7 割ぐらいの方がポスドクになって、ポスドクの 3 割ぐらいが 2 回以上ポスドクをやる。最終的にどこに落ち着くかというのが、ここにいろいろな研究職や民間企業などがまとめてあるのですが、このうち特に注目すべきかと思うのが、アカデミアのテニユアトラックあるいはテニユアのポジションに就く方というのはポスドクから移行される方のだいたい 23% ぐらいであるということです。ここにありますように、Ph. D. から大学の正規教員というのはわりと思ひ浮かぶキャリアパスだと思うのですが、それは当たり前前な状態ではないという現状があり、またそれは日本でも同様かと思ひます。

特にキャリアパスをこれから考えていく方に知っていただきたいのですが、現状のそのような状態に問題があるかどうかということがまずあると思ひます。ただそこに問題がある場合、それは社会のせいなのか、国のせいなのか、誰が問題を起こしたのかということがありますが、それはそれとして、実際に誰が困つて、放つておいて解決するのか、誰かが解決しなければいけないのかということを考える必要があります。また、これ

は別に問題がないという場合でも、アカデミアで研究者を続けるのはもちろんそれは非常にいいことですが、本当にそれだけでよかったのか、もともと自分はそれしか興味がなかったのかどうか、それ以外に何か可能性があるかということを考えてみるのもいいのではないかと思います。

それで、本日は私の経歴を紹介させていただくというのが趣旨ですので、ここから先はそのあたりについてふれていきます。まず、皆さんにイメージしてもらいやすいよう、あえて年齢や年も書いてありますけれども、私は名古屋大学で線虫の分子神経生物学、この学会でもポスター発表を何回かさせていただきましたが、そういう分野で基礎研究をして2007年にPh.D.を取りました。そのあと、イギリスの研究所で同じ分野の研究室にポスドクとして行きました。研究所も著名ですし、イギリスの研究風土は非常に自由でしたので、とても楽しい研究生生活を送っていたのですが、ちょっと将来について、特にアカデミアのポジションが不透明である。このスライドには書きませんでしたが、やはりこういうことを考えるきっかけとしてはライフイベントがありまして、私の場合、子どもができたということがありました。そういうきっかけで将来どうしようかなと考え始めるのはよくあることかと思えます。

それからキャリアの模索を開始したのですけれども、私が当時1日の大半見ていた風景というのはだいたいこういう、ベンチの上に実験器具があって線虫を追いかけているというような状態です。このような環境でキャリアについて考えると、アカデミアでなく民間であれば製薬企業で同じような実験をできたらいいなというのはわりと典型的に思い浮かぶオプションですし、それ以外はなかなか思い浮かばないというのが現状だと思うのですが、自分の研究分野をダイレクトに企業へ、例えばこの実験でいきなり「薬を創ります」というわけにはいかないの、(自分の研究分野に直接関わる仕事以外も視野に入れて)ゼロから模索を、情報を集めるということが必要になる場合が多いと思います。それで、イギリスにいた私の場合、主にインターネットで情報を集めて、日本に自費で渡航、これは当たり前ですけれども、自分のお金で渡航していろいろな大学や研究室、人材紹介会社などを訪問するというのを2回程度行いました。やはりこういう行動を起こすのはひとつ重要なことだろうと思えます。

私の場合、幸運にもその当時インターンシッププログラムを提供してくださっていた阪大の産学連携推進本部のCLICというところのプログラムに乗ることができました。ここでひとつ指摘しておきたいのは、このようなことをするとき所属のラボのPIの理解は非常に重要だと思います。私の場合はそこにも恵まれていましたが、なかなか外に出してくれないという話も聞くことがありますので、外に出られる環境づくりが必要になる場合もあるかもしれません。

私はその阪大のインターンシップのプログラムを使って民間企業に行きました。これはこういう職種もあるという事例の1つになると思いますが、米国のシリコンバレーでバイオ系のコンサルティングビジネスディベロップメントをやっている InfiniteBio という会

社にお世話になりました。こちらは創薬技術の日米間ビジネスディベロップメント、簡単に言うと、例えば日本のベンチャー企業の技術・製品を北米市場に売り込むというようなことを行っている会社です。たった3ヵ月間のインターンシップでしたが、その中で顧客というのは主に製薬企業ですので、そういうところに技術の提案をする、学会やネットで情報調査をしてレポートする、イベントで人々と交流する。こういうことをさせていただいて気づいたこととしましては、バイオ産業の中、特にベンチャーとかそういったレベルでは研究の経験が非常に有用であるということを感じました。

こちらはシリコンバレーなので、サンフランシスコの近郊ですが、いろいろな製薬企業、ベンチャーや大学もあって、このあたりの連携が非常にうまくいっている例として知られています。そういうところでアカデミアと産業界との流れやつながりを感じることができて、広い視野を持つというのはおもしろいなと私はここで感じました。アカデミアの研究も非常に楽しんでいたのですが、自分はもう少しいろいろできる、あるいは実は興味があったのではないかと気づくことができました。

インターンシップが終わったあとは、よく見ると大学の周りにも結構産業界とのネットワークのイベントなどもありましたので、そういった場に顔を出すようにしました。ただ一方で、やはり自分で研究をする、アカデミアで研究するというのも捨てがたかったので、学振のほうも申請させていただいて、幸運にも両方の道が開けました。しかし、私自身はこの時点で将来の不透明さがネガティブ要因としてあったのですが、それに加えて外の世界に触れたことでちょっと好奇心が、楽しそうだなということがあり民間企業の道を選びました。そのあとはバイオベンチャーで学術営業職をし、現在の製薬企業に至ります。

その各々の仕事について少し説明をさせていただきます。企業での学術営業、技術サポートという仕事ですが、バイオベンチャーでの学術営業というのは研究バックグラウンドの方ではわりとよくある仕事でして、いわゆる営業、お客さんのところへ行って「買ってください」と製品の説明をしたり、問い合わせがあったときに技術的な対応をし、場合によっては議論をする。状況によってはデータの解析を手伝ったり、検証実験をやられるような方もいると思います。あと、社内の研究員やお客さんとも議論をします。

バイオベンチャーというのは新しい技術をビジネスにするという環境ですので、Ph.D.を持っている人の強みとしては技術理解には当然研究の経験が有用である。顧客も同僚の研究技術部員もみんな研究者なので、同等に議論するという点でも非常に有利だと思います。あと、バイオベンチャーというのは新しい技術なので、お客さんに世界中のトップの研究者がいる。Ph.D.を取ったような方は海外の学会に行ったことがあるケースも少なくありませんし、そういうところでも特に臆することなく議論ができる。また、日本発の技術を世界に広めるといった情熱も持てる。ということで、開拓意欲が強く、研究をどんどん切り開いていかれるような方、そういうPh.D.の方にはバイオベンチャーの学術営業など、こういう仕事は向いているのではないかと考えています。

少し話が広がりますが、バイオベンチャーを含む、いわゆる製薬業界があります。製薬業界にどのような仕事があるか、Ph. D. を取ったような方がどういうところで貢献できるかということを考えてみました。一般的に薬のできる手順としましては、初めに基礎研究と呼ばれる *in vitro*、細胞実験のような期間が2~3年ある、典型的にですが。そのあと動物実験、非臨床試験が3~5年あり、実はそのあとヒトの臨床試験、治験が3~7年あります。非常に長い期間ヒトの実験、実験と言うと語弊があるかも知れませんが、治験が行われています。さらにその結果について承認の審査を行なって、承認されたあとも薬を販売していく中で情報の提供、有害事象が発生してそれに対処するとか、非常に多くの様々な手順があります。

今までお話した私がやってきた基礎研究とか、創薬支援ベンチャーと呼ばれる会社の事業は、主には遺伝子、蛋白、細胞、それからせいぜい動物実験ぐらいまでを扱うことがほとんどだと思います。ただ、実際にはこの製薬業界全体を見ますと、そのあとヒトの治療を視野にどのように開発するかを検討し、実際に開発を進める。その開発品、製品に関して外部の方々と情報のやり取りをする。いろいろな段階で共同研究をするということで、実は研究の知識や経験を生かせるポイントというのは、ここからここまで非常に幅広くあるのではないかと考えていますし、実際 Ph. D. を取った方が様々な場面で活躍をされています。

さらに、製薬業界にこだわる必要も実はないということで、こちらはイギリスの例になるのですが、vitae という団体があって、研究者のキャリアの実例をたくさん載せてあるウェブサイト<<https://www.vitae.ac.uk/>>があります。もし興味がありましたら見ていただくとおもしろいと思います。Ph. D. を取ったあとにどういうことをしているか、いろいろな人の話が載っています。大学の講師、創薬研究、このあたりは当たり前ですが、コンサルタント、知財管理、このあたりもよく言われるところですが、変わったところではコンピューターサイエンスの Ph. D. を取って陶芸家になられた方。陶芸家になる必要はないのですけれども、本当に自分の強みを生かせるのであれば何でもできるというのは気づいていたほうがよろしいかと思えます。

最後に、私の現職について、私自身、結構おもしろい仕事だと思っておりますので簡単に説明をさせていただきます。これは先ほどの創薬のプロセスの下のほうになると思いますが、メディカルリエゾン、あるいは会社によってはメディカルサイエンスリエゾンと呼ばれます。非常にわかりにくい仕事なので詳細は省きますが、医学・科学の深い専門知識を持って外部の高度専門医、研究者とやり取りをする、関係を構築するというのが主な仕事です。この専門性が疾患、治療薬、治療薬候補、基礎、臨床医学研究、いわば全部ということで、私が非常におもしろいと思っているのは、基礎から臨床までのいろいろなことを勉強しながら、実際に医療の現場にも関わっている方とやり取りができますし、基礎の研究者ともやり取りできる。漠然とした内容なので、どういう仕事かわかりにくいと思いますが、そういう業務の中で実際に行う仕事としては、論文を検索したり、社内の研究情

報を調査したり、あと学会に出るとか、共同研究のアレンジをするとか。研究に関わるような仕事ができているなかで中心になるのが、科学的知識や経験を基盤としたコミュニケーションを行うことによって医療の進歩に多面的に関与できるということで、私自身、自分の興味に非常に合っている仕事だと思っています。こういう仕事が基礎研究以外にもあるということは、もし興味がありましたら調べてみるといいのではないかと思います。

Ph. D. のコースに行かれた方は研究の中で非常に多くの能力を身につけていくと一般的に言われますが、私が特に有用だと思ったのは、研究の知識と経験はもちろん、ピペットを扱ったことがあります、そんなレベルですけれども現場の感覚がわかる。あと、曖昧な状況の中で向かう方向や研究プロジェクトを考える。そういう能力は非常に大きいと思います。それから、新しい課題を完遂するために知識を増やす。私が一番重要だと思うのは、いろいろなことに好奇心を持って探求し続けること、やっていることを楽しめるというのは研究者ならではの特性ではないかと思います。一方で、これまでのやり方に固執しないとか、適応力、チャンスを逃がさない。それから、会社に入ると周りの同じ年齢の人たちに比べて経験が少ないため知らないことが多いのですけれども、その分、強みもあるので努力していけば評価される。

このあと森先生からもお話がありますが、独力ではなかなかキャリアの構築は難しいので、そういった方々、理解者の助力というのは重要だと思います。他力を借りるという意味で、民間企業にアカデミアの人が行くにあたってどういうところを意識したらいいかということ、民間のキャリアコンサルタントの方からも意見を伺ってみました。それは、基本姿勢として状況に満足しているうちから将来を考えておくこと。あと、自分の研究以外にも視野を広く持ってオプションを知っておく。それから、チャンスと思ったらすぐに動く。Ph. D. が必要なポジションであれば、企業ではアカデミア以上に高く評価されますし、社会に対してより直接的な貢献ができます。ただ、1つのこと、自分の好きな研究分野を追求することはなかなか難しい場合もありますので適応力が必要です。

相談するうえでは大学のキャリア支援室でも民間の人材紹介会社でも同じですが、自分の特性と仕事がフィットするかどうかをちゃんと考えてくれる人に相談することが必要です。これは非常に大事な点だと思います。自分の業績を優先してプッシュしすぎるような人だとちょっとよろしくないですね。

私はこれまでキャリアをこうやってきた、私自身が特にすごいことを成し遂げたわけではなくて、ここに示すような方々にお世話になって、現在の自分があると思っていますので、ここで深く感謝いたします。ご清聴ありがとうございます。以上になります。(拍手)

○司会 谷澤さん、ありがとうございました。質問や感想などがあるかと思いますが、それは匿名メールの形でコメントを寄せられるようになっておりますので、ぜひ積極的に寄せください。

では続いて、森典華さんに講演をいただきます。森さんは名古屋大学でバイオ系の研究で博士号を取得後、ポスドク等を経て、現在は名古屋大学の社会貢献人材育成本部で特任准教授をされております。多くの博士人材のキャリア支援をされてきた戦略的な視点からお話をいただきます。それでは森さん、よろしくお願いいたします。

○森 典華 ご紹介ありがとうございました。今日はこのような場をいただきましてどうもありがとうございます。私は支援をしている側の立場からお話をさせていただきます。15分という短い時間なので、話したいことはいっぱいあるのですが、少しでもたくさんのお話を伝えできればと思っております。

まず簡単に私の自己紹介です。実は私もバイオの研究者で、分子生物学会でもたしか発表したことがありますが、現在は博士やポスドク、いわゆる研究者の支援をしています。ここ10年弱になるのですけれども、ずっと専任ですので、もう研究はやめています。その転機というのも、もちろんプライベートな結婚・出産ということもありましたが、私はプレイヤーよりはサポーターの立場で何か仕事をしていきたいということを考え、現在はそういう立場で仕事をしています。今日は、博士の方、あるいはこれから進もうかと思っている方、不安もおありだと思いますが、これまで10年弱支援をしてきて、博士は時代をリードしていく方、イノベーションを創出していく方だと本当に思っておりますので、そういうことをお伝えできれば幸いです。

その前に、名古屋大学で私が現在やっている仕事の話をしたと思いますが、今回、水色のパンフレットを配らせていただきましたので、詳しくはそちらをゆっくりご覧いただき、またメールなどでご質問いただければと思います。平成18年度から継続して博士・ポスドクのキャリア支援をしています。一番多い時期は全国で30~40弱の大学・研究機関が文部科学省の予算においてこういう支援をしていましたが、お金が切れてからも独自にそういう支援部隊を持っている大学もあれば、お金の切れ目というところもあって、ちょっと縮小している大学もあるかもしれません。本学では現在も継続しております。

特に、ポスドクがたくさん増えたときから、ノン・リサーチキャリアパス、18年度のところにあります。それをやり始めたのがきっかけです。当時は産学連携とか知財とか、博士はそういうところへのキャリアも広げられるかなというところだったのですが、現在はこれがURA、聞いたことはございますか、リサーチ・アドミニストレーターという職で、かなりの大学でこういう職の方が仕事をしているというところですが、そういうことも踏まえて、現在、ポスドクおよび博士後期の方を中心に支援をしています。

特徴を簡単にまとめたいと思います。現在は延べ1,400人以上の方に登録をいただいております。7割から8割の方とお会いし、個人面談を中心にいろいろな悩みをお聞きしています。柄になく今日は久しぶりにちょっと緊張したのですが、何人かお会いした方と目が合ってホッとさせられました。やはりそういうお話を聞きながら、私も実は元気をもらっているのだなということに気づかされましたが、そのようなことをしています。この支

援は、学内外を問わず対応しています。パンフレットにもありますが、4割が名古屋大学、6割はそれ以外の大学です。実はもうちょっと本学のケアをなささいと言われているのですが、他大学からのご相談も、最近は Skype などを使って広く対応しているという状況です。

分野としては特にバイオ系の方に注力しています。博士は工学部が多いのですけれども、そういう方のキャリアは決まりやすいということで、バイオ系の方がやはり相談に来られるケースがとて多く、そのあたりのことを企業さまにもお伝えしながら実績を積んでおります。企業さまにも頻りに訪問して現状をお聞きしたり、博士のことをお伝えしたりしています。また、企業の方にお話をさせていただく土曜日のセミナーには遠方から参加してくれる博士が大勢います。研究室にいと自分のことを見つめ直したりとか、違う業界のことを聞いたりということが少ないと思うのですが、そういう場を作るといこともこのセミナーの目的です。

また、ここの下にありますように、博士後期あるいはポスドクの方が企業のインターンシップに行くということは今まであまりなかったかと思ひます。先ほどの谷澤さんのお話にもちよつと出ましたが、現場を知っていただいて、またアカデミックポジションに戻って研究にということもあるかもしれませぬし、それがつながつて就職ということもあるかもしれませぬ。特に中小企業やベンチャーがやっていることはなかなか知り得なくて、いきなり就職するのは不安があるかもしれませぬが、そういうところへのインターンシップなども支援しています。現在は「こういう条件の方（スライド参照）」ということでやっていますが、後期課程の方も対象にしております。

さらに、夏に年1回ぐらひやっている合同企業説明会について説明させていただきます。もちろん学内外問わずご参加いただけます。午前中は異分野の方に大学院生が自分の研究のプレゼンをします。今日ポスター発表をされた方もいらっしやると思ひますが、だいたい同じ研究の人たちが集まっている学会なので、前段階なく自分の研究成果だけ発表すればいいのですけれども、正直全然違う業界の企業さまもいらっしやるところで、自分の発表をどう出せばいいのか。今年はこの発表したことによって企業さんとの共同研究につながったというケースも、実は博士後期の学生さんであつてもそういう橋渡しができた実績も出ています。午後からはいわゆる博士、ポスドクを採りたいという企業さまだけの合同企業説明会をしていました。

ここで注目すべきは、昨年度 26 社だつた参加企業さんが今年は 43 社に増えているということです。やはり景気が多少いいのかなと思うのですけれども、博士・ポスドクにとても興味を示してくださる企業が圧倒的に増えてきています。特に新規事業、今のうちに何か新規事業を模索しておきたいというときに、今までいる同じ業界の人たちではアイデアが生まれないので、違う業界の人、さらに専門性を持った博士に来ていただきたいということ。それから、アジアにかぎらず欧米も含め、グローバルな展開をしていきたいのだけれど、さてどうしようか。英語も専門のこともしやべれぬ。そういうところで、博士・ポスドクをと言つてくださる企業さんがだいぶ増えてきました。もちろん、ピンポイント

のスキルや研究分野というところに興味を持っている企業もありますが、やはりそんなことよりも人物というところ。谷澤さんのお話にも出てきたかと思いますが、そういうところでの注目がとても高いということがわかりました。

では、今から本題に行きたいと思います。幾つかの事例から、本当にうまくキャリアを構築している人とはどんな人か、一緒に考えていただければと思います。ちょっと究極です。実はこの事例を出すにあたっていろいろな意見をいただいたのですが、この4つ、特にポスドクを経てというところから出させていただきました。それ以外の就職の例はパンフレットの9ページにあるので、いろいろなところに博士の方が行かれていることは見ておいていただければと思いますが、この4つから共通点、あるいは何か感じるところはございませんか。

いろいろあるかとは思いますが、1つは責任あるポジションへの抜擢、登用があるというところ。もちろん就職してすぐという場合と、数年かかっている場合とあるのですが、産学連携に貢献してくださっていて、その研究の橋渡しをしてくださったり、センター長であったり、あるいは新規事業を提案したりとか、求人情報を大学に持ってきてくださるかというところで、やはりある程度の責任ある立場や、立場ではないかもしれないけれども役割をしてくださるといふ人材になっています。

それから、幅広い経験です。皆さんポスドクを何回もやっていますとか、インターンシップで専門とは違うところへ行きましたとか、海外に留学しているとか、全然違う業界に行くということで、今いる狭い世界にずっと閉じこもっているという方は比較的少ないようです。さらに、これらの事例の方々には皆さんご相談に来てくださった方ですが、とにかく自分で切り開かれるんですね。もちろん相談には来られるのですが、悩みながらも一歩ずついろいろなところにアプローチする、谷澤さんもそうされたとおっしゃっていましたが、まさにそういう方々でした。

今の特徴をさらにまとめますと、ピンポイントの技術や研究分野で就職したいと皆さんお思いだと思うのです。もちろんそういうことは本当に大事なので、これからもいろいろな経験をしていただきたいと思いますが、今日はそちらのほうは割愛して、ゆっくりお話ししたい方はまた後日と思っております。特に相談に来られるとき、「研究が本当に楽しくて、やりたくて、でもなあ」と言っている方には、「海外へポスドクに行ってみて、海外で自分を試してきたら」ということを申し上げます。もちろん目的や期限、その後のキャリア、相談者やら、谷澤さんと共通しているのですけれども、そういうことは事前に準備をしてから行かれるべきというところ。いろいろな企業さんに会うと、グローバルな企業でリーダーになりたいという場合は、海外ポスドクを最低2〜3年はしていないとなってもらえないということをおっしゃっていました。

一方、今日は特にこちらのお話をしたいのですが、総合的な人間力で博士を就職させていただく場合、そもそも総合的な人間力とは何か、そこが一番問題です。ノン・リサーチキャリアパス、正直、教授ももしかしたら研究をやっているわけではなく研究室をマネジ

メントしているのです、これに当てはまるのかもしれないです。とにかく視野を一回広めましょう。さらに、自分が社会で何を達成したいのだろう、社会をどう変えたいのだろう、社会に何か影響を及ぼしたいのか、それは何だろうというところを見つめ直し、そのとき実際にそれはほかでやられているのか、いないのか。やられていないのなら、なぜだろう。やられているのなら、どういうところがあるのだろう。そういうところを試行錯誤しながら調べていただいて、本当に自分が今後やっていくんだ、やっていきたいというところを一度見つめ直していただけるといいと思います。

ノン・リサーチキャリアパス、ここにありますがけれども、研究以外の専門職、あるいは異分野への転身。先ほどありましたように、こんな感じの異分野への転身みたいなことですね。我々のところへご相談に来られる方は企業とかアカデミックの研究職になれる方、博士なので当然そういうところへ行かれると思うのですが、案外アカデミックでも URA のような職だったり、企業でも異分野や研究以外の職に就く方も比較的多く活躍されているという実績になっています。

このときに申し上げているのが、やはり目的の職にポンと就く方はなかなかなくて、やはり「わらしべ長者」、皆さんご存じですか、昔話です。大きい目的があったら順番にワンステップ、ツーステップで進んでいくことも必要であろうということです。何かの関係でちょっと先が見えなくなって落ち込みつつあるときでも、それがチャンスなので、ぜひそちらをつかみ取っていただきたいとアドバイスしています。

では、どうしたらいいのかというところですね。たいていの博士はこちらで動かれるのではないかと思います。探した求人票の中から自分の研究分野に合うものを見つけ、どうにかすり合わせて、何とかここなら応募できるかと思って応募してみる。もちろんこういうことも大切です。特に博士後期の新卒採用で動かれる方は、これにせざるを得ないときもあるのですが、それだけではダメで、こちらです。博士・ポスドクの方に企業が求めていることとは、実現したいことや社会にこうしたいということを提案して、それを明確に伝えられるようにまとめる。それを実現できるのはどこなのか。お金がありそうな超大手で実現できるのか。いやいや、小回りが利くベンチャーなのか。それがアカデミックポジションでなければ実現できないのならそういうところを探す。

面談とありますが、面接の場も博士はディスカッションの場として、私はできればそうしてもらいたいと思っています。お互いディスカッションしてすり合わせていく。夢を実現する場ではなくて、一番近い場を探すのがポイントです。できる限り近い場。夢を追いつつ実現できる場を探し続けると一生見つからないかもしれないので、近い場を探して、見つからなければ「わらしべ長者」的に次のステップを考えましょうというお話です。

そうは言っても、どうしても「博士が何でそんな企業に」というのがあるかと思っています。BtoC、消費者に物を売っている会社だったり、大企業だったり、研究職だったりすると、「博士にそういう企業はいいよね」という言われ方をしますが、例えばBtoBであまり知られていない会社だったり、中小企業だったり、あるいは研究職ではなかったりすると、「なんで

博士まで行ったのに」みたいなことがまだまだ巷では言われるかもしれません。しかし先ほどのように、やはり実現したいこと、どうしていきたいんだということを持っていれば、ここはちゃんと自分の中で整理をつけて歩み出せるかと思っています。

では、企業のニーズについて簡単に触れたいと思います。これは我々のセンターで以前取った資料です。博士を採用する可能性の有無ですが、従業員 5,000 人以上の大企業では「採りますよ」、一方、ベンチャーみたいな小さい企業も「採りますよ」ですが、この 50 人~200 人の企業というのはまだまだ博士の採用が少ないのです。でも、今後は新規事業に参入する可能性があるので、そういう提案を持って売り込んでいくと皆さんの活躍も広がるのかなと思っています。

では、企業は何を言っているか。研究者である前に人として備えているべきことはできるようにしておいてください。とにかく、一緒に働くのが変な人では困ってしまいます。もう一方で、研究者であったのでもというところで、研究スキルや業績以外にマネジメントをしたり提案したり、とはいっても企業さんはさらにプラスアルファ、会社の方針に順応して欲しいと贅沢なことをおっしゃいます。そういうものを持ち合わせて新しい職や役割を担える、良い影響を及ぼす人が欲しいとおっしゃっているわけです。

では、どうしていくか。皆さん日々お忙しいので、そうは言っても特別なことをあえて今からするというのは難しいとは思いますが、この水色のところは普段からやられているのではないのでしょうか。それ以外にも、先生の代わりに研究室の運営をしたり、先生が大会長になりましたということで企画運営、あと若手の会などをやったり、あるいは国際的にもいろいろな場に出ていく。実はそこがすごくスキルアップになっていますし、自分の魅力にもなるチャンスなので、そこを意識してやっているか。また、意識していなくても、あとから振り返って、こんな経験をしてきたというものをちゃんと自分で意識できるか、そこでだいぶ変わってきます。もうちょっと言うと、学部生の方がいらっしゃったら、飲食店でのアルバイトで全然違う、今までに出会ったことがない人と接する機会を作るといいということを企業さんはよくおっしゃいます。業績も出したいので、つい目先の研究に一生懸命になりますが、幅広い経験をしてたくさんの人と出会っていくことが大切です。

今日は時間がないのでこれは割愛しますが、優先順位を決めたりとか、備えていくものがこうだったりとか、あるいは先ほど言ったように抱負をしっかりと提案できるようにというようなことを、日々我々は面談等でアドバイスしています。また、そういうこともお話しできる場があればしたいと思います。ブースのほうにもいますので、ぜひまたお越しください。

そういう中でさまざまなプログラムもご紹介します。例えば文科省や JST、JSPS、経済産業省、厚生労働省、農林水産省とか、国の機関の概算要求から採択情報などをチェックして、例えば「博士 研究 イノベーション 若手研究者」みたいな用語で調べていくと、どの大学がどういうプログラムをやっているというのかがわかります。ですので、そういう支援があるところにポストドクを応募していくとか、支援に乗るとか、そういうことを

して、せっかくの大学院時代、あるいはポストクの時代なので有効に使っていただくと思います。とりあえず調べてみてください。調べ方がわからない、どう活用していいかわからないというときは、また後日聞いていただければと思います。

これが最後になります。博士は時代をリードする人たちです。イノベーションを創出すると最初に述べましたが、イノベーションとは何か、イメージはなんとなくあるのだけれど。最近私が思いますのは、感動を創出する。今まで学生の時代は「100点取った、良い結果が出た、ラッキー！」と自分が感動していたと思います。でも、ポストクになって就職となると、お金をいただくこと、そのときには人を感動させていくことになると思います。良い製品を作った「わあ、便利。これ、おいしい。この薬、効く。」と人を感動させる。あるいは、「この先生、すごくわかりやすいな！」とか。学会あるいはサイエンスカフェなどで世の中の人に研究成果を発表する。「こんなことを、細胞ってすごいんだな！」と感動させてあげる。そういうふうに取り組むこと。そういうことができるのが博士かなと思って支援をしております。まだまだお話をしたいことはありますけれども、また今後質問があればブースのほう、あるいはホームページ等で連絡していただければと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 森さん、ありがとうございました。それでは、ケータイゴングを使った双方向パネルディスカッションに移りたいと思います。パネリストの先生方にご登壇ください。会場のみなさまは専用サイトにアクセスしていただいてアンケートへの回答をお願いします。手元の集計ではまだまだアクセスされていない方がいらっしゃるようですので、ぜひアクセスください。谷澤さん、森さんの講演に対する感想も、そちらの下の方にある自由記述、匿名メールを送信できるようになっていますので、そちらからお送りいただければと思います。

パネリストの皆さん、準備はよろしいでしょうか。ここからは当キャリアパス委員会の、これまで多くの博士を育ててきた先生方に参加していただき、会場の皆さんと意見を交換して、より議論を深めていきたいと思います。まず、パネリストの皆さん、自己紹介を兼ねて今回のテーマについてコメントをお願いできるでしょうか。1分以内でお願いします。塩見さんから。

○塩見美喜子 キャリアパス委員会の委員長を務めさせていただいております、東大の塩見と申します。よろしくお願いたします。聞いたことないなという方もいらっしゃるかもしれませんが、キャリアパス委員会に関して少しお話をさせていただきたいと思います。分子生物学会ではこれまで、男女共同参画委員会と若手教育問題ワーキンググループが、特に若手の抱える問題にそれぞれの視点から取り組んできたのですが、若手研究者がおかれる状況はいまも決して満足のいくものではないということで、これらをより広い視点から捉える目的で大隅理事長により統合され、キャリアパス委員会として立ち上がりま

した。

昨年は、神戸年会にて、ベンチャー企業の現状と研究テーマの選び方、2つのランチョンセミナーを行いました。キャリアパス委員会が主催する3つめの企画として今日は、谷澤さんと森さんのお話を伺うことに致しました。キャリアパス支援として実際にどういうものがあるのかなということを今、皆さんも学ばれたかと思います。ここでは私たちとケータイゴングを使ってパネルディスカッションをしますけれども、今度は自分の磨き方ですね。キーワードは皆さんに柔軟性を持ってもらう、私はそれが一番大事かと思っています。自分を磨く、養う、という意味で。そのあたりを意識して皆さんとやり取りができればいいと思います。ありがとうございます。

○佐藤 健 群馬大学の佐藤健と申します。私は、うちの学生さんが相談に来たときに「悩むことはいいことだ」というふうに常に言っています。自分の現状というのはどんどん変わっていくわけで、そこで一番自分のいいチョイスは何になるのか、それを知ること、自分自身の道を考えることはものすごく大事だと思っています。また、それは今日、お二人の講演者から幅広いキャリアパスを提案していただいて、やはりそういうものも含めて一番いい、自分に合ったチョイスができればいいのではないかと考えております。よろしくお祈いします。

○柳田素子 京都大学腎臓内科の柳田と申します。私は臨床系ですので、これまで自分がERATOに行ったときなどでは製薬企業の方と一緒に研究をする機会が多かったのですが、見てみるとやはりだいぶ姿勢が違います。私たちが非常に研究をパーソナルにとらえて一喜一憂するのに比べて、チームワークで当たられて淡々と仕事を進められる。また、いろいろな部署を移って来ておられるので、様々な経験を積んでおられる。そして、一人の研究者では成し遂げられない大きな創薬のようなプロダクトに向けてみんなで働いていく。そういう意味で企業の研究者の方はアカデミアの研究者と目指す方向性に少し違いがある。違いがあるのだけれども、だからこそ面白いという部分もあって、これらの差異を皆さんに知っていただくことが必要なのではないかと考えております。そのうえで、どちらが自分に向いているのかを考える。そういう意味で今日の試みは非常に素晴らしいと思っています。よろしくお祈いします。

○東山哲也 名古屋大学の東山です。私は常々、博士の学位を持った人材がもっと活躍できるような世の中になればいいなと思っています。今日の二人のご講演を聞いていますと、少しずつそちらへ向かっているのだなというのを実感しまして、嬉しく聞いておりました。今日はよろしくお祈いします。

○井関祥子 東京医科歯科大学、井関と申します。よろしくお願ひいたします。お二人のお話を聞いていて、アメリカでは約 25%がアカデミックに残っていく。では残りはということなんですけれども。それで私、谷澤さんよりも前、10 年ぐらい前にイギリスへ留学しておりまして、そのとき周囲にいた大学院生やポスドクの人たちの就職先をちょっと考えてみました。もちろん今は変わっているかもしれませんが、警察官、鍼灸の学校に行き直した人、あとは当時まだ珍しかったのですが、インターネット限定の旅行会社に勤めた人もいました。このように考えてみると、実はいまの日本、まだまだキャリアパスの多様性に関しては追いついていないのではないかと思います。ですから、今のポスドクや博士課程の学生さんたちが、その多様性については逆に追い越して欲しいという状況だと感じました。よろしくお願ひします。

○司会 ありがとうございます。では早速、6つの設問をそれぞれ見ながら進めていきたいと思ひます。まだ間に合いますので、答えていない方はぜひアクセスしてください。最初の「設問 0. 練習設問」に行きたいと思ひます。まず皆さんの属性についてですが、もう結果が出ておりますね。やはり一番多いのが「学部・修士課程在学」の方で 40.8%、「博士（後期）課程在学」が 22.4%、「ポスドクまたは非 PI の任期付き職」が 20.4%、「PI 職または任期無し職」の方が 5.9%、「企業」の方も結構多いですね、9%ぐらいいらっしゃるということです。「その他」の方、もしよろしければどんなポジション、特に技術職などはここに書いていないのですけれども、自由回答のほうでお寄せいただければと思ひます。今回のセッションで扱っている内容について、今まさに当事者として考えられるような方が多い、そういった結果かなと思ひます。ここからあとの設問は、すでに PI 職の方は博士課程の頃あるいはポスドクの頃を思い出して回答いただきたいと思ひます。

では、「設問 1. 将来のキャリアパスに不安を感じていますか？」ですが、まさに明らかな結果ですね。「不安を感じている」が 7割ぐらい、「不安を感じていないわけではないが、気にしていない」が 23%ぐらいですね。「不安を感じていない」が約 7%という結果です。もし、こういった不安があるという、具体的な不安がありましたら、それもメールでコメントをお送りください。この結果を見てパネリストの皆さん、どうでしょうか。塩見さん。

○塩見 「不安を感じている」という回答が一番多いかなと私は予想していましたが、やっぱりそのとおりになりましたね。不安ですよ。私でも自分の将来、この年になっても不安です。何で不安かというとな見えないからですよ。将来は見えないので仕方がないのですけれども、不安、不安といっいても仕方がないので、それをどうにかして良いようにコンバートするかなんですけれどもね。あまり大きな不安は、自分の将来、自分のキャリアパスにもしかしてダメージを与えてしまうかもしれないということで、それはなくしていくのがいいだろう。ただ、それ（不安）がゼロになってしまう、つまり全部自分の将来がわかってしまうとおもしろくないですよ。そういうこともありますから、その不安をあ

る程度軽減しつつ、それをもって緊張感に変えるというのがいいのではないかなと思います。そんなやり方をここで皆さん学んでいただけたら、一緒に話ができたらいいかなと思います。

○司会 ほかの皆さんはいかがですか。あるいは、この自由記述の、先ほどの講演に対する感想などもあると思いますので、コメントから拾っていただいても大丈夫です。

○谷澤 1点コメントですが、状況を不安と感じるかどうかはおそらく人にもよると思うので、講演のときにもお話ししたとおり、それをきっかけに自分が日常見ている専門の分野以外にも目を向けられるかどうかということが、長い目で見ると大事になってくるかなと思います。

○司会 もう少し具体的に言うと。

○谷澤 具体的には調べるということですよ。不安だと思っても、調べることで安心するということもありますし、どういうオプションがあるか、どういうコンタクト先があるか、そういった具体的な情報を自分で調べることはいつでもできますので、もし不安であればすぐにでも調べてみたほうがいいと思います。

○司会 そうですね、コメントの中にも、「博士課程に進むに当たり、その後の就職や将来に不安があります」というものがありますね。それから統計ですね、そういった生の情報がないことが不安につながっているという意見もあります。先ほど講演に出たことで補足したいこと、あるいはそれ以外にこういったところで情報を得られるなど、もしご存知の方がいらっしゃいましたら何かありますでしょうか。

○塩見 例えば、並木さん 13 番をアップできますか。「結婚とか出産とかのタイミングが難しいのが不安」、本当にこれは難しいですよ。でも、何でそれが不安かというと、より良いものを求めるからかなと思います。でも、たぶん 1 回しか人生はないので、より良いってないですよ。だから私は、やりたいときにどうぞというのがいいのではないかと実は思ったりするんですけど。どうでしょうね、皆さん。

○井関 結婚とか出産、もちろん全てではないですけども、今は大学の中にも、出産する女性を助けていこうという動きが出てきています。こんなことを言っているのかどうかわかりませんが、上の男性の先生が「ああ」と思いつつも、大学の中、皆さんが所属する機関の中にはこのようなライフイベントを助けていかなければいけないだと思っらっしゃる先生は今たくさんいらっしゃいますので、ぜひ、勇気を出してください。タイミン

グもあるかもしれませんが、いつなの？とあまり考えすぎるとできないので、ちょっとジャンプしてみるのもあると思います。そのときはもちろん、適当な人を訪ね歩いて相談していただきたいと思います。

○司会 ありがとうございます。専用サイトの URL をもう一度表示していただくことはできますか。こちらのアンケートにはこの URL からアクセスできます。時間がございませんので次の設問に移ります。

「設問 2. アカデミアでの就職へのこだわりの強さは？」、アカデミアへの就職にどれだけこだわりがあるかということを伺いました。これもかなりはっきりしましたね。「アカデミア以外は考えていない」という方が 10%ぐらい、「アカデミア外もぼんやりと考えている」が 45%、「アカデミア外も具体的に考えている」という方が、これは結構多いような気がします。約 25%ですね。「アカデミア外をメインに考えている」という方が 20%ぐらい。どうでしょうか、皆さんの実感と合っている結果でしょうか。こちらを受けて谷澤さん、コメントをもらえるでしょうか。

○谷澤 「アカデミア以外は考えていない」という方ももちろんいらっしゃるということで、やはり目標が明確にあって、今までせっかくアカデミアでやってきたのですから、それを継続して目標を達成したいという方、それが一番いいキャリアだと思います。それ以外の場合は、アカデミアの内外にこだわる必要はさほどないのではとっていて、情報を集めて自分に合う環境を見つける。私が今まで経験してきた仕事では、どこでも何かしら研究をやっているような、何か興味があって調べて、わかれば嬉しいというようなことがよくありますので、アカデミア内外にこだわらず興味がある方はいろいろ視野を広げられるといいのではないかと思います。

○司会 ありがとうございます。コメントのほうでも「アカデミック向き、企業向きあるいは研究以外に向いていると感じることはありますか？」というものがあります。20 番ですね。それから「パネラーの先生方はご自身の学生、ポスドク、助教のキャリア形成をどのように指導あるいは支援していらっしゃいますか？」、「学会で人脈を築きたいのですが、なかなかきっかけがわかりません。」といった質問が寄せられています。いかがでしょうか。

○柳田 私も人脈の築き方を先輩に聞いたことがあって、「とにかく質問をしろ」と言われたのです。質問をするときに自分の名前と所属を名乗ります。そうすると、その質問がいいと、聞いていた方から同意のフィードバックがあったり、あるいは質問をされた講演者は少なくとも覚えてくださる。自分の発表はもちろんですけども、そういう意味

でどんどん自分から発信して行って、質問の機会を捉えていくというのは自分をアピールする1つの方法かなというふうに思っています。

○司会 ありがとうございます。ちょっと時間が押してまいりましたので次の設問に移りたいと思います。「設問 3. 博士として国や職場（会社／研究機関）を変えつつキャリアアップしていくことをどう思いますか？」まさに、谷澤さんに講演いただいたようなキャリアに関する質問です。

これもまたはつきりしました。「魅力あるキャリアパスとして捉えている」が6割以上、「経験を積めるのは良いが、海外に出るのは避けたい」と「国は問わないが、一つの職場でキャリアを重ねたい」という方がそれぞれ10%強いという結果になっています。こちら、東山さん、コメントをいただけますか。

○東山 一番上の「魅力あるキャリアパスとして捉えている」という数字がこんなに高いとは想像していなかったので、すごく嬉しい結果と思います。この辺がやはり博士を持っている人の強みという部分でもありますので。

あと、さっき結婚・出産のタイミングということもありましたが、気持ちとしてはこう思うのだけれども実際家族のことを考えると、というようにいろいろ制約が出てきてしまうこともあると思います。そういった現実的な問題については、また別の方面からのサポートがもっと必要だろうと思います。

○司会 今日の講演の後ということもあるかもしれないですね。他にもコメントがありましたら、お願いします。

○佐藤 私のまわりには、企業に行ってからまたアカデミアに戻って来る人もそれなりにいらっしゃるのですが、企業に行ったら戻って来られないということはないと思います。外資系の企業が研究所を突然閉鎖すると言って、それで放り出された人のケースもありますが、そういう方たちでも私たちの知り合いの中でまた大学の研究機関へ戻って教授になっている方とか、あるいは違うカンパニーで働いている方とかもいて、皆さん何とかやろうとすれば、それなりに道は開けてくると思いますので、キャリアを重ねていくということ自体はプラスに捉えていいのではないかと思います。

○司会 そうですね、「ノンアカデミアの非研究職に就職するとアカデミアに戻れないのが、不安の要因の一つだと思います。」こういうコメントも多く寄せられていますね。それから、「以前の日本企業では修士卒を採用して育てるというやり方が多かったようですが、海外研究者とすぐに渡り合える博士卒を採る比率が上がっていると思います。」という企業の方からのご意見もあります、ありがとうございます。「修士卒の研究者は会社の研究で学位を

得られれば幸せですが、実際はどうやって学位をとるかで苦勞している人が多いです。」というご意見もあります。もう一度コメントを振り返ってみますと、「不安を感じていない博士学生です。」という方ももちろんいますね。19 番の方で、「アカデミア以外でもアカデミア就職でも、自分の強みを認識するべき。」というのは大変力強いコメントですね。ありがとうございます。どうでしょう、特にキャリアや職場を積極的に変えていくということについて、コメントはありますか。

○森 キャリアを変えるということで行くと、さすがに 18 年度からやってきているので、実は 1 つ目の会社から次のキャリアアップに変更したという方も続々出てきています。別に辞めたくてとか、小さなベンチャーだったからもう嫌だとか、そういうわけではなくて、やはり皆さん、次へ次へとつながっていらっしやいます。また、多くありませんが、アカデミアに戻られている方もいらっしやいます。もちろん学部、修士のときの研究分野に戻れているかというところというわけではないのですが、多様なキャリアを歩んでいらっしやるといふ傾向はあるので、やはり次々に行きたいという方は常に発信して、常に情報収集をして動き回っているのは確かだと感じています。

○司会 ありがとうございます。キャリアを移り変わるにあたっての支援については、次の設問 4 に関わってきますので、設問 4 に進みたいと思います。「設問 4. 自分のキャリアパスについて相談できる人は誰ですか？」森さんからは支援室の働きについて紹介いただきましたが、「大学の相談室など」は残念ながらちょっと少ないですね。一番多いのは「先輩や友達など」で約 34%、次は「指導教員・PI」が 27%弱。この設問は複数回答可なので、つまり指導教員やPIに相談しないという方が 7 割ぐらいいる。そういうことになるかなと思います（笑）。次が「親や家族など」これが 25%ぐらいですね。「大学の相談室など」が 5.5%、ちょっと少ないという感じがいたします。「特にいない」という、これはやはり苦しい感じがしますけれども 9%ほどということになります。これは井関さん。

○井関 たしかに、指導教員に相談しないが 7 割以上というのは困ってしまいますが、ただ、私も自分が学生やポスドクだった頃を考えるとちょっとしにくかったかな。そういうときに近くの研究室や共同研究をしているPIの先生に少し聞いてみるのはいいと思いますね。先ほど、「自分がアカデミ、もしくは企業に向いているって何で決めるんですかね」という質問がありましたが、まず自分で客観的に考えるのは必要だと思います。ただ、やはりなかなか自分では決めきれない。そういうときに友人、もしくは直の指導教員は無理でもお隣の指導教員の先生への相談が必要だと思います。そうするには普段からコミュニケーションを取っておくのは大事なことです。コミュニケーションというのは相談のためだけではなくて、いろいろと自分のことを知ってもらい、自分の可能性を知ってもらいという意味でも大事なことではないかと思えます。

○司会 ありがとうございます。実際にキャリアについて相談があった場合、どのようにアドバイスするかということでも結構ですし、また新しいコメントも届いております。先ほど幾つか指していらっしやいましたので、拾ってコメントをいただければと思います。

○森 「大学の相談室など」のご利用が少ないので、ぜひ今後は利用していただきたいと思うのが1つ。それと、ここに来られている「指導教員・PI」の方はたぶんご理解のある先生ですが、まだまだこういうところに来るといふことさえも否定的な先生がいらっしやるのも事実なのかもしれません。案外、相談を始めると思った以上に話を聞いてくれる先生は多いです、ケンカぐらいしている指導教員と博士ついでいらっしやるんですけど、本当に腹を割って話すとすごく親身になってくださるというケースも見ています。こういう学会に来たときにちょっとお酒の席に行つてとか、ぜひ相談に乗っていただければと思います。

さっき男性のところ「正直、結婚したいけど、学生だと結婚してもらえないと思う。」というのも一緒に、誰に何を相談しているかで、家族あるいは相手、男性でも女性でも、常日頃から自分の思い、やりたいことを話していれば、もしそれを理解してくれて収入がないことであっても、逆に時間的には融通が利くかもしれないので、そのあたりはあえて問題にしようとせず、その時々で指導教員や家族などとじっくり話していただけたらと思っています。

○司会 先ほど「学会から帰ったら相談室覗いてみようかな」というコメントもありました。それから谷澤さんの講演でも、なかなか一人の力では難しい、いろいろな人の力を借りることが必要だということですが、やはりこういうときにコミュニケーションを取れる相手が多くいることが大事ではないかと思ひます。まさに、この「おやじ」さんのコメントのとおりですね、「普段からコミュニケーションをとれる人がいるといいですね。」

最後の設問に行つてしまひましょうか。これはまとめを兼ねた設問になります。「設問5. キャリアパスを切り開くために、(今回の講演も受けて) あなた自身がこれから伸ばす必要があると思う力は？」どれも高いですね、一番高いのが「語学力・国際的な交流経験」で19.1%、次が「専門的知識・技術」で17.6%。専門的というよりはむしろ「多様な課題の分析や提案」が16.2%、次が「コミュニケーション」。「プロジェクトマネジメント」が結構低いですかね、10%を切つています。それから「文章の執筆力」もちょっと低くて、「プレゼンテーションスキル」がちょっと増えて11.7%となっています。プロジェクトマネジメントとか文章の執筆力とかはどんな職種でも大事なかなと思ひますが、少し意外な感じもしますけれども、森さん、コメントをいただけますか。

○森 どれをとということはないのですが、こういう講演を聞いて「ああ、よかった」と帰られる方が多いと思いますが、これをあえてアクションしますかということを知りたいのは、皆さんが今日意識して、早速ポスターセッションの前で声を掛けてその先生の所属を聞いてみようとか、相談室をのぞいてみようとか、少しでも実際の行動に移していくと大きく変わっていくので、何か1つやって欲しいということ。それから、「語学力・国際的な交流経験」という点では、先ほどある企業の方にお聞きしたら、海外ポスドクを求めている企業展をボストンなどでも大々的にやっていたりもするのですが、「そういうところに来られるポスドクが最近減っているんだよね」ということもあるので、学部生の方もぜひ将来的にそのあたりまで頑張っていたらなと思いました。

○司会 ありがとうございます。今、34番ですね「私は大学の相談室に相談して希望する仕事につきました。」こういう方もいるということを知りたいです。コメント、ありがとうございます。時間が迫ってまいりましたので、最後にこのコメントをぜひ拾いたいとか、そういうことがありましたらお願いします。

○柳田 「PIが研究大好きだと、進路相談してもいい答えが来なそうです」という33番ですけれども、私はそんなことはないと思っています。PIはやはり学生さんの人生というものに非常に責任を感じていて、みんながそのあとハッピーになってくれることが一番大事だと思っているはずですよ。私のところもMDだけではなくてPh.Dの方がいらっしゃいますが、みんなにアカデミアでも就職でもハッピーになってもらいたいと思っていますので、そこはもっとPIとコミュニケーションを取ってもいいのではないかなと思います。

○司会 ありがとうございます。いろいろご意見は尽きないと思いますが、最後にまとめの意味を込めて、パネリストと講演者のお二人からメッセージをいただきたいと思っています。塩見さんから、お願いします。

○塩見 冒頭にも話したのですが、今日は二人の演者の方に来ていただきまして、それぞれからお話をいただいて、谷澤さんからはその経験、森さんからはサポート、こういうものがあるよということを知りました。これも言ったとおりですが、今度はもう自分ですよ。今、いろいろな「伸ばす必要があると思う力は？」ということによって回答がありましたけど、これはキャリアパス、企業へ行くにしても、アカデミアに残るにしても、やはり大事なことです。どんな道を歩むにしても大事なことで、まず一番大事なのは何かというと、自分のウィークポイントを知る。自分を見直すということかな、それが大事だと思います。全部を一緒にはできないので、そのウィークポイントを見つけたら、この半年はこんなふうにしてそれをオーバーカムしてみようとか、直近の予定を立てること

もいいかなと思います。ぜひ自分を磨いて柔軟性とか社会性とか、そういう大事なことも養って自分の人生を大事にしていって欲しいと思います。

○佐藤 私としましては、やはり節目節目で一回自分の現状をよく考えて、新たなキャリアパスはないかと探す。そして、最後に自分で決めるということがすごく大事だと思います。結局流されてしまうと、あとあとそれが失敗したときにもものすごく後悔してしまうと思うので、今日の講演で幅広いキャリアパスの道がご説明にありましたように、そういうものも含めて自分はどこが一番合っているのかをしっかりと考えて決めていく。その決断に従ってやっていくということが非常に大事ではないかと思いました。

あと、名古屋大学のビジネス人材育成センターは非常に充実しているのですが、ほかの大学、例えば地方大学ではそこまで機能していなくて、「大学院生は知りません」と言われることもあり得ますよね。ですから、大きな人材育成センターのようなものを国が主導して1つ作り、いろいろな大学の世話をしてくれると本当に合理的でいいのではないかと思います。ありがとうございます。

○柳田 私からのメッセージは、変わり続ける世の中に対応し続ける体力をつけようということです。ここで言う「体力」というのは、例えばいろいろな経験値だったり、テクニックだったり、独自の視点だったり、あるいはネットワークだったり、最後は誠実さだったり、いろいろなものがあると思います。5年前、10年前には考えられなかったほど大きくなった新しいフィールドを見落とさずに対応できる人間力を磨くことが大事かなと、自分でも思っています。

○東山 さっきコメントの中で「早く結婚したい場合は博士課程に行かない方がいいのか？」とありましたが、僕も学生結婚です。思い出してみると、僕が学生結婚した頃にやっぱり学生結婚したベテランの先生から「学生結婚すると早く出世するよ」と言われて、別に根拠もなくすごく嬉しかったことを思い出しました。今日聞いていて、直属の先生と話しにくいとしても周りにはいろいろな先生方がいますし、また、こういう学会は、名前だけは知っているけど話したことがなかったような先生とも出会える場ですし、勇気を出していろいろな人たちと話してみるというのが、アカデミアにしる、企業に行くにしる、いろいろな道が開けていくチャンスにつながるのかもしれない。あるいは、自分に役に立つコメントをもらえる機会になるのかなというふうに改めて思いました。

○井関 膨大な情報の中で、どの情報がいいかは自分で決めるしかない。そこで選んだものは自分で責任を取るしかないということなのかなと思います。ただし、先ほども言ったように、選択するときにコミュニケーションを取って相談する。よくよくいろいろな人の意見を聞く、ということは大切です。どなたかも先ほどおっしゃっていたように、最後の

決断は自分ですけれども、ぜひこのような形でキャリアを切り開いて行って、キャリアパスの多様性も追い付き追い越せで、いろいろな多様性が出てくるといいなと思っています。

○谷澤 私の場合、自分の経験から特に感じるのは、とにかく行動することが大事だということです。自分の目標が定まっている方はもちろんそれに向けて全力で頑張ればいいですし、ちょっとそうでもない、どうしたらいいかわからないという人は相談するということが重要になります。先ほどのアンケート結果で、大学の支援室への相談がちょっと少ないというのが気になったのですが、特に民間企業をオプションとして考える場合、民間企業のことを知っている人ですね、大学の支援室であったり、そこに行きにくい場合は民間の人材紹介会社でも別にいいと思うのです。実際その現場を知っている、どういう状況か知っている人に話を聞くことで、具体的にステップが見えてくると思います。ですので、自分がそれをできるかどうかとか、いろいろと心配になるとは思いますが、まあ動いてみたら助けてくれる人はいるというのが私の経験からの実感です。

○森 ここにいらっしゃる方は皆さん、たぶんすごく調べることが上手にできますし、考えることもできる方なので、考えすぎ、調べすぎてしまうと思うのですが、ある程度やったら、先ほど先生方が言われたように動いてみてください。それから、うまくいったときは自分が頑張ったからだ、うまくいかないときには人のせいにしたくなるものですが、自分の人生ですし、いつかまた巡り回ってそれがいい思い出になるときもあるので、苦しいときは相談に来てください。以上です。

○司会 それでは、今日は講演者、パネリストの皆さん、ありがとうございました。会場からも多くのコメントをありがとうございました。拍手をお送りいただければと思います。
(拍手) お手元にアンケートがあると思います。それは会場の出口で回収しておりますので、ぜひお出しいただくようにお願いします。それでは、本日はどうもありがとうございました。